

自由学園
100人の
卒業生＋

Volume 01



「自由学園100人の卒業生+」プロジェクトによせて 学園長 高橋和也

自由学園は、2021年に創立100周年を迎えます。100周年に向けたプロジェクトの一つとして、「自由学園100人の卒業生+」シリーズが動き始めました。

独自の人間教育に取り組む自由学園の教育の価値が、一体どのような実を結んでいるのか。卒業生の生き方を通じて確認し、学園内外で広く共有することを目指したもので、私自身もインタビューに加わり、最初の10人の卒業生の話を聞き終えたところです。

今回の10人の平均年齢は35歳。在学中に私が担任をした人も含めて声をかけ、インタビューに応じていただきました。

中学高校時代に関わらせてもらった「生徒たち」にこのような形で再会できたことは、本当に懐かしく、うれしいことでした。当時はわ

からなかった新しい発見もありました。

何より印象的だったのは、一人ひとりが心の軸ともいえるべき信念を持っていたこと。それぞれの仕事を通じて、日々自分自身を磨き続けているということでした。

「自分は何のために世に來たったか、自分のなすべきことは何であるか、天は小さき自分の存在を保証するために何を自分に求めているかと考えることが、すなわち品性修養の基礎となる」

（羽仁吉一『品性とは何ぞや』）

これは、人間教育の目指すところを示した創立者、羽仁吉一の言

自分は何のために世に來たったか

自分のなすべきことは何であるか

—— 羽仁吉二（自由学園創立者） ——

葉です。

私たちは神様によって、地球上にたった一人しかいない存在として創られたかけがえない存在です。すべての人にその人だけの個性、その人にしか果たせない使命が与えられています。

自分が何を大切に生きていきたいのか、どうやって自分を活かしていけばよいのか。この答えを得る方法は、一人ひとり異なっており、そこにマニュアルや教科書はありません。他の人の真似をするわけにもいきません。毎日の生活の中で、自分自身の課題や関心と精いっぱい向き合い、試行錯誤しつつ心の声に耳を傾けながら、次第に明らかにされていくものだと思います。

このような意味で自由学園は、4歳から22歳までの一貫教育を通

じて幼児、児童、生徒、学生たちが、さまざまな経験によって自分自身を知り、自分自身を磨く場として創られた学校ということができます。そしてその学びは、生涯を通じて続く探究の入口であると、インタビューを通じて感じています。

自由学園は小さなスケールによる手づくりの教育を大切にしていますが、卒業生の活躍の場は非常に多様です。また、既成の枠にとらわれず、自分らしく創造的に生きる道を選択していく人も多いのではないかと思います。この企画を通じてそのような「独自性」「多様性」「創造性」も伝えていきたいと思っています。

女性も「先頭に立つ勇氣」を

浅野由紀／Yuki Asano

イオンクレジットサービス株式会社

1992年最高学部卒業

アメリカでの出会い

学園卒業後、輸入家具のお店に就職し、1脚30万円の椅子や、ワンセット100万円の高級ダイニングセットをバンバン売っていました。そこで、教養あるお客様の接客をしながら、自分がどんなに世界を知らないかを思い知らされました。

一念発起し、貯めたお金でアメリカへ留学。向こうの単科大学でインテリアデザインを専攻しました。この1年間は、毎日大量の宿題が出されて、24時間泣きながら、寝る暇もなく勉強していました。

その後マンハッタンでBed Bath&Beyondというホームファッション専門店で就職し、販売員になりました。ある日、イオン(当時ジャスコ)の人たちが視察に来て、日本人だからと案内に行くと、そ

の中にとても話し好きのおじさんがいたんです。自分が最初に作ったカーテンがどんなに売れたか、どれだけ安い羽根布団が作れたかという話で盛り上がり、「じゃあね!」と何も買わずに帰られました。

後にこの方が専務(当時常務)だと知ったのですが、その夜の宴会に呼んでいただいて、普段食べられないお寿司までご馳走になりました。それから半年後、クリスマスの日に「うちの会社に来ないか」と、専務から電話がかかってきたのです。

ダイバーシティ勉強会のメンバーに

アメリカで働き続けるのに迷いもあった頃で、「お世話になります」と言って帰国。イオンに入社して今に至ります。

イオングループ内のいろいろな会社で働いてきましたが、転機となったのは2007年。社内でダイバーシティ勉強会が始まり、そのメンバーの一人になった時です。ダイバーシティは「多様性」という意味。人種や性別などを固定させず、色々な人が活躍できるようにし、生産性を上げようという動きです。

まずは、女性の経営幹部への登用を増やすことを目標に、勉強会が立ち上げられました。私は当時、メガスポーツという会社の商品戦略部にいて、仕事ものりにのっていました。たまたま行った本社の近くで久しぶりに先輩の女性社員に会い、仕事のことを話したら、「アサノも成長したね」と(笑)。彼女が勉強会のメンターの一人で、来ないかと声をかけられたのです。

もう一人、入社時代から私を知っている尊敬する男性社員の方も勉強会の立ち上げメンバーで、その二人から言われてチームリーダーも引き受けました。でも当時は、どうして自分が女性活躍のことをしなくてはいけないのかわからず、しぶしぶやっていたんです。

それでもチームのメンバー6人で、半年後に社長の前で行う15分間のプレゼンのために準備をしていきました。もともと分析が得意だったので数字を調べたら、私の同期の女性が6年で6割も辞めていました。小売業は社員やパート合わせて7対3で女性が多く、お客様も女性の方が多いのです。それなのに、役員にはほとんど女性がいません。ショックでしたが当事者意識はあまりありませんでした。

一方で、この勉強会の他のメンバーは必ず管理職登用されると思っていました。みんな私よりずっと優秀で、ちゃんと勉強もして資格も高く、バリバリ働いています。私以外はメンバーもメンターたち





も、女性活躍が重要な課題だと認識していました。先輩から「ここまでできたのだから、降りるな」と言われ、そこで目が覚めました。こんなに応援してくれている人がいるのなら頑張らなければ、と。

それまでは、仕事は楽しいから一生懸命やるけれど、役職に就きたいとは思っていませんでした。でもこれからは資格のランクを上げて経営幹部にならないと、後輩たちはついてこないし、会社のためにもならない。私をアメリカからひっぱってくれた専務は数年前に病気で亡くなりましたが、80年代から女性活躍に取り組み、いつも私を励まし応援してくださっていました。その思いに応えるためにも役職につき、後輩たちのロールモデルになりたいと思ったのです。

頑張ろうと決めてからは、登用試験を真面目に受けて毎年1つつ資格を上げていき、09年に経営幹部に登用されました。

こだわらない

役職に就きたくないという女性がいるのも事実です。会議室に入っても、女性はすぐに端に座ってしまう。「女性もきちんと前に出なさい」という教育がされるべきだと思います。06年の東大の卒業式で当時の総長が「先頭に立つ勇氣」について話しておられましたが、私も今はこの組織の中で、先頭に立つ勇氣をきちんと持ち続けたいと思います。とはいえ、管理職は大変です。11年から子会社の社長をしましたが、どんなに周りに相談しても、結局決めるのは自分。責任もとらなくてはいけない。やっぱり孤独です。

30代後半の頃から思っているのは、「こだわらない」ということ。

求められたら断らないで、呼ばれたらどこへでも行き、しなやかに、折れないように働き続けることが大事かなと。与えられた場所で一生懸命に働き、どんなことでも絶対に手を抜かない。学園で学んだことの一つに「三角道をしない」があります。これは近道をせず正しい道を選ぶという意味ですが、小売でも金融でも大事なことです。誰も見ていなくても悪いことはしないし、ゴミが落ちていたら拾います。

今みたいに企業倫理が問われている時代には、社員一人ひとりの真摯さがとても大事です。働いている限り、必ず相手は人間ですから。人を裏切らず、積極的に、誠実に働きたいと思っています。(2016年10月27日談)

左ページ上 | 1994年、オレゴンの語学学校の卒業式で。中央右が浅野さん(本人提供)
左ページ下 | 2002年、仕事で訪れたフロリダで仕入れ商品リスト作成中(本人提供)
右ページ | 東京ビックサイトで行われたITpro EXPO2016にて

1972年生まれ。92年自由学園最高学部卒業後、アビス株式会社に入社。イタリア輸入家具販売員となる。94年西オレゴン州立大学へ語学留学。95年New York School of Interior Design入学。96年Bed Bath&Beyondに入社。マンハッタン店で販売員をする。97年イオンリテール株式会社入社に伴い帰国。01年MDオペレーション部、05年(株)ブルーグラス、06年(株)メガスポーツ、09年(株)イオンライフ、11年(株)ATジャパン(社長職)。14年より(株)イオンクレジットサービス(部長職)。

随処作主 ～今の任務に全力で向かう～

中島 慎吾 / Shingo Nakashima

千葉県警察

2009年 最高学部卒業

子ども時代に出会ったお巡りさん

父親も警察官でしたが、私が警察官を目指したのは父とは関係ありません。両親が共働きで鍵っ子だった小学2年生の時、自宅まであと数メートルというところで鍵を下水溝に落としてしまった。日も傾きかけて心細くなり、自宅裏の交番に行ってお巡りさんに相談すると、道具を持って一緒に来てくれて、落ちた鍵を拾ってくれました。そのお巡りさん、作業をしてくれている間ずっとニコニコしていたんですよ。警察官を目指した直接のきっかけはその出来事です。

父親はとても厳しくて、小さい頃から葛藤がありました。学園在学中もぶつかって家出したこともあったくらいです。でもその後、少しずつ関係はよくなったかな。

警視庁勤務だった父は、最後の数年、自ら希望して駐在所勤務をしました。そのとき、地域の人と気さくに接する父の姿を初めて見て「あぁいいな」と思い、葛藤もなくなった気がします。

人のためになっているのか？

最高学部4年のときに地方公務員試験に合格し、卒業後は千葉県警に入りました。最初に入った警察学校の同期は40人くらい。教官からは厳しくしごかれ、精神的なプレッシャーをかけられて、10カ月後の卒業時には、約30人にまで減っていました。

辛かったですが、父親との文通で支えられました。その後は交番に配属されましたが、2つ目に勤務した交番で、このまま警察官を続けるかどうか迷うくらい、衝撃的な事件がありました。

ある夜、近所に住むおじいさんが「眠れない。部屋に人がいる」と交番に来たので、一緒に部屋に行き、確認しました。特に異常はなかったのですが、「大丈夫ですね」と言ってその時は終わりました。

その3日後。朝の見回り中に、交番近くの公園で散歩中のおばさんから「お巡りさん、来て!」と呼ばれて行ってみると、人が首をつって亡くなっていた。署員を呼んで、その方を降ろして、所持品を見たときです。





運転免許証の顔写真で、3日前のおじいさんだと気が付きました。

亡くなると人の顔は、こんなにも変わってしまうのかという衝撃と、もしかしたらおじいさんが最期に会って言葉を交わしたのは私だったのかもしれないという思いとで、忘れられなくなってしまって……。

その出来事以外にも、仕事中に警察をよく思っていない方たちから罵詈雑言を浴びせられることはしょっちゅうでした。ひどい言葉を浴び続けて、本当にこの仕事は人のためになっているのかと悩みました。

与えられた場所で最善を尽くす

ちょうどその頃、機動隊に異動になりました。警察学校時代に射撃の成績が良かったことを覚えていた上司に「やってみないか」と言われ、拳銃の特別訓練員として訓練を受けることになったんです。



異動直後に東日本大震災が発生。地震発生1週間後に大槌町へ出動しました。そこではただただ絶望感しかなかった。悲惨な現場で、ここで人が生きていられるはずがないというような、淡い期待すらも抱けない状況でした。1週間、ひたすらご遺体の収容をしました。きつかったけれど、警察官を辞めるか続けるかの悩みはなくなりました。

今は、射撃の特別訓練員になって6年目。警察官に射撃の指導をする教官になることを目指して日々訓練をしています。最初の2年間くらいは「的に弾が当たればいいだろう」くらいにしか考えていませんでしたが、だんだんに「やるからには教官をめざそう」と思うようになりました。

交番勤務の警察官は、毎年必ず射撃訓練を受けます。しかし、限られた時間の中でどうしても自分の思うようにいかず、「やっぱり射撃は苦手だ」と言う人もいます。でも、それをそのままにしてしまっただけでは助けられないものがあるんです。射撃に苦手意識を感じる警察官の力になりたいと、今は思っています。

学園の生徒で、警察官になりたいと話を聞きに来てくれた人は数人いますが、そこで私が言うのは、警察官になって学園で学んだことが生かせると思わないほうがいいということ。本当になりたいという確固たる芯がなければ、できる限り他の道考えた方がいい。警察の世界は社会の暗い面に触れることが多く、幸せな学園生活とはギャップが激しすぎて、正義感や情熱だけではとうてい続けられません。私の場合は父親が同業という環境もあったし、小さい頃から目指していて、自分で決めてなったので、続けているのかもしれませんが。

私自身も、小学校時代に鍵を拾ってくれたお巡りさんのイメージと、実際の交番勤務のギャップが激しくて、辛かったのは事実です。一方で、警察官とひとくちに言っても職務の幅が広く、今は毎日拳銃を撃つことが仕事になっています。

仕事に向き合う時いつも思うのは、学園時代の友人が高等科3年の書初めで書いた「随処作主 立処皆真(随処に主となれば、立つ処みな真なり)」という禅の言葉。これは、渡辺和子先生の「置かれた場所で咲きなさい」という言葉にも重なります。いつでも自分のその時の任務、今は拳銃の訓練に全力で向かうことで、その仕事の真髄を知り、周りに翻弄されずに続けていきたいと思っています。

(2016年10月13日談)

左ページ | 射撃は一瞬の感覚の世界。心身を研ぎ澄まして的に向かう

右ページ上 | 千葉県警察の制服姿で

右ページ下 | 訓練用のトレーニングウェアにも「随処作主」の文字を入れている

1986年生まれ。2009年自由学園最高学部卒業後、千葉県警察へ就職。同年4月に千葉県警察学校に入校。柔道、剣道、射撃、逮捕術などの実技、法律などの科目の研修を受ける。10年2月警察学校卒業、千葉中央警察署に配属。千葉駅前交番に勤務。警察学校時代の射撃の腕を見込まれ、11年3月警備部第一機動隊へ異動、拳銃の特別訓練員となる。異動後すぐに東日本大震災の被災地へ機動隊員として出動した。現在特別訓練員6年目。

絶対に文句は言わない、ずるはしない

櫻井彩子 / Ayako Sakurai

フリーアナウンサー

1999年最高学部卒業

オーディション合格は10本に1本

私は映画が好きで、大学時代にエキストラのアルバイトをしていました。その事務所が学生リポーターを育てたいということで声をかけられ、在学中からDELLの社長にインタビューしたり、大田市場でせりの取材をしたりと、なかなか普通ではできない経験をし、これを仕事にしたいと思っていました。

ところが、大学3年の時に父が亡くなり、自分で稼いで生活していくためには安定した仕事に就かなくてはだめだと、一般企業に入社。それでも、あきらめきれずにアナウンサー養成学校に通いました

養成学校在学中から番組のオーディションを受け始め、アナウン

サーの仕事も開始。その後、会社は辞めて、フリーアナウンサーになりました。父が金融関係の仕事をしていたので、自宅には関連本がたくさんあり、会話の内容も金融のことが多い環境だったので、経済番組に強いアナウンサーを目指しました。

オーディションは10本に1本受ければいいくらい。3年目頃までは、オーディションに落ちるたびに原因を考えていたのですが、とある企業CMのオーディションがあり、競争率が500倍くらいだったのに受かりました。そこで、どうして受かったのかを聞いたら、帰国子女ではないのに、「一番帰国子女っぽかったから」と言われたんです。それを聞いたとき、自分がいろいろ準備しても仕方ない部分のほうが大きいかなと、肩の力が抜けました。



自分の強みを持つ

アナウンサーの仕事で特に気を付けているのは、自分が納得した内容を話すということ。たとえ台本に書いてあったとしてもそのまま読まず、疑問があれば制作の方に質問し、納得してから読むようにしています。

もう一つは、その場にいる人が気持ちよく話せるように、気を配ること。たとえばいろいろな企業のトップの方にお話を聞くラジオ番組では、事前に1時間ほどゲストと打ち合わせをするのですが、そこでいかにリラックスしてもらい、本番に向けてよい雰囲気を作れるかを考えます。

ここでは、自由学園で学んださまざまな経験が生かされています。ありとあらゆる業界の方にお会いしますが、一度も話題に困ったことはありません。

たとえば、NGOの代表で子どもたちと登山をしている方とは「学生時代の遠足で、ニッカポッカを履いて山登りしました」と学園での経験を話すと、「ニッカポッカを知っているの?!」と驚かれて一気に距離が縮まりました(笑)。当時の東京芸術大学の学長とは、油絵の話で盛り上がりました。学園にいた頃から美術が好きで、趣味で描いたイラストが番組のリスナープレゼントになったこともあり、今では仕事のひとつになっています。さまざまな経験を積み重ねれば、自分のベースは学園生活で作られたものだと感じます。

私の強みは、アドリブが効くこと。キャスターを担当したレギュラーの経済番組でも、5年目くらいから制作の人に「適当に質問を入れて」と頼まれるようになりました。

金融系の番組は、リスナーも金融に強くてひと癖ある人が多いので、私のようなキャスターが初歩的な質問をアナリストにすると、「そんな素人をキャスターにするな」とクレームがきます。すると、キャスター自身も、アナリストのようなコメントを求められるようになってしまう。でもそれは、私のスタイルと違うと思いました。私が素人だと言われても構わない。内容がわかりやすく、伝わりやすくなればそのほうが良いと思って、あえて初歩的な質問もしました。

そうやって現場の数を重ねていくと、前の番組で一緒にいたアナリストの方が、他の番組に推薦してくださり、だんだん仕事がつながっていきようになって、5年目くらいから「仕事が回りはじめたな」と感じました。

その場所で一番になる

学園卒業後は、大学に進学してからも、就職してからも、常に私は「ここで一番になる!」と思ってやってきました。「天下をとる」くらいの心意気で(笑)。

進学した大学は第一志望ではなかったのですが、父が病気で浪人はできず、妥協して進学しました。その大学が英語に強かったのとことん勉強し、入学時には一番下のクラスだったのに、1年後には一番上のクラスになった。そこで身につけた英語力は就職してから役立ちました。当初希望した大学ではありませんでしたが、頑張っ

たなりの学びがあったと思います。

アナウンサーというのは代わりがいくらでもいる仕事ですから、「櫻井さんでないと困る」と言われる仕事をしようと思っています。そのために絶対に文句は言わない、悪い事やずるはしない、という信念をもってやってきました。

人生は思い通りにならないこともあるけれど、ふてくされずに与えられた場所で頑張ることで、ついていく力は必ずあると思っています。

(2016年9月22日談)

左ページ | 最近イラストの仕事を引き受けることも増えている

右ページ上 | 教育関係の解説VTR制作中のひとこま(本人提供)

右ページ下 | 担当していたレギュラー番組「21世紀のカタチ」収録後の一枚。メインキャスターの林信行さん、ゲストの畑中洋亮さんと(本人提供)



1979年生まれ。99年自由学園最高学部卒業後、東洋英和女学院大学入学。在学中からリポーターの仕事始める。03年(株)三菱総合研究所社内派遣研究アシスタント。06年フリーアナウンサーとなり、「マーケット・アナライズ」(BS12ch2WellV)、「夢企業探訪」(ラジオNIKKEI)他多数のレギュラー番組、単発でのCM、テレビ番組等を担当。これらの仕事と並行し、10年より産業カウンセラーとして東洋英和女学院大学就職相談員を6年間務めた。夫の仕事の関係で、ビザが下り次第渡米予定。

エモーショナルな映像を撮りたい

大久保拓朗 / Takuro Okubo

株式会社セップ 映像ディレクター

2004年最高学部卒業

アーティストとファンを喜ばせるために

セップという映像制作会社でディレクターをしています。主な仕事はミュージックビデオ(MV)の制作。ポピュラー音楽の新作が出ると、広告の一環として作られる映像です。

ちょうど一昨日も、ある歌手の方のMV撮影をしてきました。だいたい撮影は1日。早朝から深夜まで複数のロケ地を回ることもあります。

MVの制作は、僕のところへ曲の音源が送られてくるところから始まります。それを聴いてイメージを膨らませ、アーティスト本人の希望などを聞いて、企画書を書きます。その後、衣装やメイクなどの具体的な相談をし、ロケ地の候補を制作部の人に出してもらって、撮影場所が決定します。それから最終的なプレゼンとなり、撮影当日を迎えます。その後はだいたい1〜2週間で編集作業をして納品です。

今年でこの業界に入って10年目。これまでにMVを100本以上作ってきました。たくさん作っていると、MVの王道の作り方、たとえばサビの部分ではこう撮るでしょう、という型のようなものが、良くも悪くも身につがちです。でも僕は、それを全部取り払って、常に新しいもの、今まで誰も見たことがないものを作りたいと思って仕事をしています。それは、曲を作り歌っているアーティスト、そしてそのファンの方たちを喜ばせたいからです。一種のサービス業と言えるかもしれません。

初めてのマイノリティの感覚

映像ディレクターを目指した理由は、父が音楽好きで、兄が映像好きだったことが大きいです。その両方に携われるMVの制作がしたいと思っていましたが、MV専門の制作会社の新卒採用自体少なく、僕も業界について詳しくわかっていませんでした。学部4年の時には、広告制作会社や映像制作会社を対象に、就職活動をしたものの全滅でした。

学園を卒業した先輩に自分の考えを聞いてもらったら「お前が何をやりたいのかまったくわからない。芯がない」と言われてへこみました。同時にムツとしましたが、でもきっとそれが本当だったから、受からなかったのだと思います。

こんな漠然とした思いだけではだめだ、と留学を決意。親に頼んで留学資金を出してもらい、イギリスで2年間映像制作の勉強をしました。ロンドンで勉強をしたといえど聞こえがいいですが、僕にとってこの2年間は本当につらかった。学校の生徒は9割がイギリス人で、在籍した「監督コース」40人中、アジア人は僕だけでした。

イギリス人は外国人に優しい部分もあり、最初はあたたかく見てくれていたのですが、周りの英語が早すぎて理解できず、僕はどんどん話せなくなりました。すると「こいつあんまり面白くない。意見言わ





ないし」と思われて、相手にされなくなったんです。

それまでの人生で味わったことのない、マイノリティの感覚でした。一人だけ、ジンバブエからの留学生が仲良くしてくれて、彼のおかげでなんとか卒業できましたが、イギリス時代のことは僕の中で傷になっていて、最近まで誰にも話せませんでした。

ただ、よかったのは、度胸がついたこと。向こうの授業では日本人が1人もいない中、100人くらいを前にして、英語でプレゼンをしなければならなかったの、日本で就職するため今の会社を受けた時には、面接で「日本語がわかる相手に話すなんて楽勝!」と思いました。わりと堂々と話せたのでしょね。とんとん拍子に就職が決まりました。

生身の人間を見て、感じる

入社してから4年間は、プロダクションマネージャー(PM)をしました。簡単に言えば何でも屋です。お弁当の発注からスケジュール管理、各セクションとの予算交渉など、大変でしたが、5年でディレクターになると自分で決めていたので、乗り越えられたのかもしれません。

PMの2年目でライブ映像を編集する仕事を、3年目には、あるバンドのMVを作るチャンスにいただきました。その時は楽しくてしょうがなかったですね。いまだに最初のMV作品は見返します。自分がどういう感覚で作っていたのかを確認したくなるのです。

ディレクターはそれぞれ、CGに強いとか、独特な世界観があるなどの強みを持っています。でも僕はグラフィカルなことではできないから、撮ってつなぐしかない。そうなった時に、よりエモーショナルなものを作りたいと思っていることに、最近気付きました。

映像を作る時は、ディレクター以外にアーティスト、カメラマン、照

明の人がいます。もちろん僕は「こういう感じにしたい」という期待像を持ってのぞみますが、それぞれが自分なりに「これがいい」という演出をしてくれるのが好きなんです。常に全員が自分で考えて行動する。これは僕が学園にいた時から、自分に言い聞かせていることでもあります。

たとえばカメラマンに、「全身が入るように撮って」と伝えてあっても、アーティストの瞬間のすごくいい表情をカメラマンが思わず寄って撮る、ということもあるわけです。そういう自分一人の演出ではできない現場での化学反応が起こった時が最高で、その映像を編集するのは本当に幸せです。

結局僕は、生身の人間を見て、感じたい。そしてそれを映像で表現したいんです。(2016年10月21日談)

左ページ上 | 社内の編集室で。MVの編集作業の真っ最中
右ページ下2点 | 大久保さんの制作したMV作品のキャプチャ画像



laugh out loud! Records NMB48 甘噛み姫 2016



UNIVERSAL MUSIC RADWIMPS 記号として 2015

1982年生まれ。2004年自由学園最高学部卒業。同年9月から06年9月まで、ロンドンのRavensbourne College of Design and Communication(現:Ravensbourne)で映像制作を学ぶ。帰国後07年(株)セップ入社。制作部プロダクションマネージャーの後、11年より演出部ディレクター。主なMV作品に、阿部真央「女たち」(2016)、東方神起「サクラミチ」(2015)、吉井和哉「(Everybody is) Like a Starlight」(2015)、ゲスの極み乙女。「バラレックスベック」(2014)、AI「ハピネス」(2011)他多数。

求め続けなければ 何事も叶わない

丸野慶光 / Yoshimitsu Maruno

株式会社竹尾 ロンドン駐在

2003年 最高学部卒業

人と人がこすれ合う経験

僕は紙の商社で営業を担当していますが、紙は生活の中で広く使われるので、国内外のいろいろな分野の人たちと関わる機会が多くあります。こうした人たちとのコミュニケーションは、自分では向いているほうなのかなと感じています。

その理由の一つは、自由学園で受けた幅広い分野の教育とさまざまな体験が下地としてあることだと思っています。卒業後に習得していった知識なども、在学中の教育や体験から派生したことが多くあります。

もう一つは、学園生活で人と人とのこすれ合いを体験してきたというのも大きく影響しています。こすれ合いとは、学園生活でのさまざまな当番や、行事の運営、寮生活の中などで起こる人間関係の軋轢です。この軋轢は起きた段階だけでなく、解決していくのにもかなりのエネルギーが必要です。これらが多様なコミュニケーションに対応できるようになったことの基礎になっていると思うのです。

人とぶつかって、つらい挫折も体験し、相手を尊重しながら自我を確立する。この経験を中学生の段階で本格的にスタートできたのはよかったと思っています。仕事も人と人との関係で成り立っているので、このこすれ合いを経験せずに社会に投げ出されていたら、その分だけ社会に出てから苦労していたでしょう。

大規模で生徒も大勢いる学校に比べると、1学年1クラス、同級生が40人で教室は一つというのはとてもコンパクトです。ただ、逆に

その状況下に置かれていたからこそ、より多様で濃密な人間関係の体験ができたのではないかと思います。

誰も知らない情報の全体像をつかんでいく

仕事で接しているのは、ブランドオーナーなどのエンドユーザーから地場の印刷会社までさまざまです。僕は新規の訪問が多いのですが、そのための事前の情報収集にはとても労力が必要です。その企業の業界の中でのポジション、特徴、歴史、商取引上の習慣の違いなど、多角的に考察しながら商談の準備をします。

以前インドへ出張する機会があり、その都市で最も格式の高いホテルにアプローチを試みたことがあります。日本から連絡してもなしのつぶてだったので、現地に行って、ホテルのロビーで担当者が会ってくれるまで帰らないと粘りました。最後には担当者が折れて1時間後に会ってくれたのですが、ただ残念ながら何もビジネスにはつながりませんでした。

ニーズに関しても、相手が明確に「こういう紙が欲しい」と要望を伝えてくれる、わかりやすいケースはほんのわずか。表面化していない情報を捉えながら、相手もまだ気付いていないニーズを、いかにこちら側から掘り起こして提案できるかが課題です。

すべての情報が表面化し、成功までになすべきことがわかりやすく把握できていれば苦労せずにすみますが、入念に準備しても失敗に終わることは多くあります。新規の訪問や、前例のないことをする





ということは、自分で成功イメージを持ちながら、やってみるしかない。誰も知らない世界に踏み込むのは時に怯むこともあります、とにかく一歩前進する以外方法はないと信じています。0を1にするとは、そういうことなのだと思います。

会社では仕事を通じてこういった経験をする機会に恵まれ、さまざまな環境の中で情報を集めながら仕事に結びつけていくことを徐々に身につけてきました。

一方で、厳しいですが、求めたものすべては叶わないという現実があります。でも、それでも求め続けないと、一つも叶わない。自分にとって求め続ける原動力は、少し大げさですが使命感や責任感に近いものです。学園の入学式で語られる、「自分の属する場をよくするためにここにいる」という言葉は、今でも自分の行動の核となっています。家族、会社、社会など、すべてです。僕は自分の存在意義もそこにあると思っています。

周りの人が喜ぶことを

話はそれますが、香港駐在の最後に、倉庫の入り口が少し汚れていたのが気になっていた、休日に同僚には内緒でペンキを塗ってきれいにしました。香港で信じられている風水では、商品が出入る扉をきれいにすると、商売繁盛につながる運気がとても上がるそうです。

翌日、「誰だ、いたずらしたのは?!」、「そんなことするの、MARUNOぐらいだ」と言われて、とても喜ばれたことは今でもよく覚えています。

人間関係に本気で向き合い、自分がしてもらって嬉しいことを他の人に行っていると、自然と周りの人も喜んでくれると信じています。

すべてに通じているのは行動することの重要性です。何かをやるかやらないか迷ったら、とにかくやってみる。行動しなかったことで後悔することは時々あると思うのですが、行動を起こして後悔することは、実はあまりないように思います。

迷ったらやる。行動が大事。僕自身、これは学園時代から大切にしていることです。(2016年9月11日談)

左ページ左 | 竹尾の紙が閲覧できる「見本帖本店」(竹尾ホームページより)

左ページ右 | バルコムミュージアムで、シンガポールのデザイナー兼アートディレクター、テセウス・チャン氏と。チャン氏の作品の前で(本人提供)

右ページ | モナコで行われた展示会LUXE PACKで、ドイツの製紙会社グムンド社の社長フロリアン・コーラー氏と(本人提供)

1980年生まれ。2003年自由学園最高学部卒業後、1899年創業の紙専門商社、株式会社竹尾入社。約4年の国内営業部業務を経験後、海外部へ異動。08年、香港へ出向。2年間駐在し、10年に帰国。16年9月よりイギリス・ロンドンに駐在。

人に「幸せ」を感じてもらえる仕事を

佐々木多恵子 / Taeko Sasaki

アロマセラピーインストラクター／ビューティーセラピスト

1997年最高学部卒業

教室の空気が好きだった

私、女子部講堂の後ろにある教室が大好きで、そこで授業を受けるときはいつも「幸せだな」と思っていました。小中学校で過ごしたコンクリートの校舎はあまり好きではなかったんです。でも、自由学園の教室の雰囲気や、室内から見える自然、寒いときは寒くて、暑いときは暑いという感覚も大好きでした。

こんなに学園の建物が好きだったのに、それがフランク・ロイド・ライトに由来することは全然意識していなくて。ある日テレビを見ていたら、「あれ？学校の建物に似ている建物だな」と思って、そこで初めてライトを知ったのです。それから図書館に行って、ライトと名の付く本を片っ端から読みました。私がいいなと思った空間には意味

があり、歴史があったことがわかり、もっとライトのことを知りたいと思うようになりました。

学園では農作業や掃除の時間があり、日常的に土に触れますが、高等科のころはそれがイヤでイヤで。いつも「私、女子高生だよ？なんで土まみれにならなきゃいけないの？」と言っていました。

でも、ライトに恋をして、ライトが自分の作品を「有機的＝オーガニック」と表現していることを知り、土の感触、風の音、太陽の光、全部を知れば彼の世界にたどりつけないかと思い、学部2年のグループ勉強（選択制の授業）は農芸を選びました。学校の花壇を担当し、土作りをしながら、その感触にすごく癒され、「こんなに気持ちがいいのに、どうして今まで土に触ってこなかったのだろう」と後悔しました。こうした作業すべてがライトの理解につながると思っていたので、本当に充実していました。



父の病気をきっかけにアロマの世界へ

私はのんびりした性格なので、卒業する年の秋になっても進路が決まっていませんでした。この年は美術展があり、お客様の中に「こんなに素晴らしい環境でのびのびと勉強してきた人が、うちの会社に就職してくれたらいいのに」とおっしゃった方がいらしたそうで、そのご縁で大高建築設計事務所に就職。最初は事務職で入りましたが、これまでライトを知るためにしてきたことを話すと、2年目から大学の工学部第2部で建築を学ぶ環境もいただきました。

その後いろいろな機会を得て建築関係の仕事を続けていたのですが、父が病気になり転職。病室で母が父のマッサージに使っていたエッセンシャルオイルに癒され、それがきっかけで植物の香りを使って体や心を整える、アロマセラピーに興味を持つようになりました。

建築をつきつめたいという思いはありましたが、父の見舞いの時間がとりやすい派遣の仕事に変え、建築とは全く関係のないコールセンターで働きました。同時にアロマセラピーのアドバイザー・インストラクターになるための勉強をスタート。

思えば私、常に働きながら学んでいるのです。大変でしょうと言われるますが、学園では常に勉強しながら働く生活だったので、違和感はありません(笑)。アロマは自然に触れるし、健康に役立ち、香りで快適な空間を作ります。その空間を気持ちのよいものにするという点では、建築と同じような考え方で取り組めたと思います。

広くいろいろ経験してみる

私はもともと、生活の中で誰かに「幸せ」を感じてもらえる仕事をしたい、という思いをいつも持っていました。

たとえばアロマセラピーを覚えての頃、海外旅行のツアーで一緒になった女性が時差ぼけで具合が悪くなったことがありました。私が持参したエッセンシャルオイルを渡すと、翌朝から「ウソみたいにすっきりした」と元気になり、とても感謝されました。

そんな経験もあって、人の生活を手助けするアロマセラピーを仕事にしたいと関連会社に入り、ショップやスクールの運営を経験。33歳で独立しました。



最初に働いた建築事務所が、33歳定年システムをとっていたので、私も漠然と「どんな仕事に就いても、その年で独立しよう」と決めていたのです。その後は美容専門学校でアロマセラピーについて教えたり、美容関連のPRやナチュラルメイクの指導もしています。

独立当初、2カ月間は収入ゼロ。打ち合わせに出て企画を出しても、気付くとアイデアだけ横取りされていた、なんてこともありました。でも、独立する前に「万が一、生活に困ったら、近所のお店でアルバイトしよう」とだけ決めていたので、あせりはありませんでした。結果的にバイトはしませんでした、生活していくために必要な働きなので、それが落ち目だとも思いませんでしたね。

好きなこと、やりたいことに素直になるって大事だと思います。自由学園は、広く多分野のことを学べるので、その環境を最大限に生かして、生徒さんたちはいろいろなことに挑戦したらよいと思います。社会に出た時、その経験が思わぬところで生きてきますから。(2016年9月20日談)

左ページ | アロマセラピーのレクチャーをおこなう(日本アロマ環境協会「アロマの現場」より)
右ページ下 | 中日美容専門学校美容科2年生のアロマセラピー基礎講座(本人提供)
右ページ上 | ナチュラルオーガニックイベントでのメイクセミナー(本人提供)



1976年生まれ。97年自由学園最高学部卒業後、大高建築設計事務所に就職。翌年から工学院大学建築学科で学びながら働き、2002年3月卒業。03年(株)環境計画へ転職。設計部で公共施設などの設計にかかわる。04年父の入院をきっかけに、派遣会社に所属しインターネットサポートのコールセンターで働く。その間日本アロマ環境協会のアロマセラピー資格を取得。05年アロマ関連会社・パスカルコミュニケーションズに就職。09年独立、講師活動を開始。

矛盾のない生き方を選ぶ

瀬寝碧海 / Marin Nejime

ギター製作者

2009年最高学部卒業

木の性格を見きわめる

6年前からクラシックギターの製作と修理の仕事をしています。ギターはこれまでに30本近く作ってきました。機械を使わず、全部ハンドメイドなので2本同時に作って2カ月くらいかかります。1本よりも、2本一緒に作るほうが、効率がいいんです。

ただ、僕はまだ手が遅いのと、間に修理の仕事なども入るため、作れるのは年間6本ほどですね。自宅に工房が併設されていて、毎日起きて、作って、寝て、という感じです。だいたい9時頃から作業を始め、遅いときは夜の12時頃まで作っている時もあります。

もともと父親がギター製作者で、学園を卒業して1年たった頃弟子入りしました。最初に覚えたのは塗装です。父が昔作ったギターの塗装をはがして、塗り直しました。5本くらい練習で塗り、塗装が十分にできるようになってから、やっと木の部分の作業に入りました。

木は自然物なので、一つとして同じものはなく、木目の流れや構造などを見きわめて削りや貼りをしていきます。最初に「こういう音にしたい」と思って試行錯誤しながら作り、その音質に近い音が出た時はとても嬉しいですね。機械で木部を一定の厚みにしても、ある程度の音質は得られますが、木のそれぞれの性格を見て、それに合わせて作ると、よりよい音が出せる。これは手仕事でこそ得られるものだと思います。

しかし、「今回は完璧なものが出た」と思うことは、まずありません。もちろん全力は尽くしますが、毎回「次はこうしたい」と思う部分が出て来るので、また工夫しながら作ります。その繰り返しです。

1本目の楽器が完成したのは2011年でした。そのギターだけはまだ売っていませんが、2本目からは楽器店に卸して、販売しています。自分の作ったものに対して値段が付くというのは、初めはとても不思議で、自分がどれだけの仕事をすれば値段に見合うものになるのか想像がつかず、責任と重圧を感じていました。どうの方が買ってくださっているのかは、詮索はしません。楽器は作って世に送り出したら、自分の手を離れていく。子離れのような感じでしょうか。

スペインのマエストロ

2012年に、父のマエストロ(師匠)でもあるアントニオ・マリン・モ

ンテロ氏に師事するため、スペインに3カ月滞在しました。ちなみに僕の名前は、この方からいただいています。工房では、最初の1週間は作業を横で見ているだけ。その後、少しずつ仕事をさせてもらえるようになりました。

マエストロは、ギター作りで毎回同じことは絶対にしません。常に変えていくんです。木の削り具合や、角の処理、内部に貼る板の位置など、常によりよい音を求めて試行錯誤していました。変えていくことは結構勇気がいるのですが、その姿勢は崩さない。父の工房ではマエストロの製作工程を引き継いでいますが、スペインで「うちではこうやっている」と言う「まだそんなことをやっているのか」と言われたくらいです。

また、教えるときは「こうしなさい」とは言わず、「たとえば自分はこうするけれど」と言って見せてくれます。でも最終的には「自分の思うやり方でやりなさい」と。木部に紙やすりをどの程度までかけるのか、いろいろな部位の高さも「ここでいいな」という感覚は人によって違うので、「これだ」という方法を自分で探していくしかないでしょう。彼の考え方、あり方は、仕事をしていく上でとても大事なことを教えてくれました。

人と離れた生活がしたかった

僕はお金が嫌いなので、学生時代は社会から独立した生活、たとえば言うならば、山籠もりをするような生活が理想でした。ですが、





人間社会で生きている以上は、お金を切り離すことはできません。

人間もあまり好きではない。矛盾や建前が多いからです。その結果、学部に進学してからも、人間とお金という概念が生み出す疑問を棚上げて先に進むことはできませんでした。しかしそれは途方もない問答だったので卒業後の進路を就職活動に求めず、フリーターになりました。自分の生き方をどうすれば矛盾させずにすむか考えたかったのです。

自分の思うように生きられて、なおかつ人間としての生活がきちんとできるものは何か。1年間考えに考えてたどり着いたのが、父の仕事であるギター製作でした。

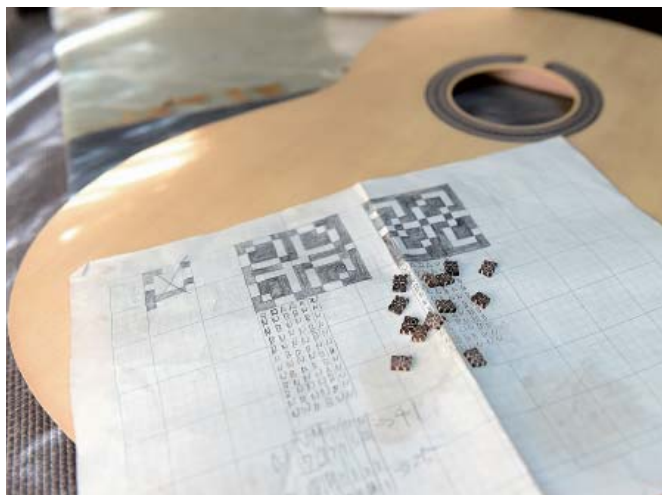
当時一人暮らしをしていたので、父には電話で「弟子入りさせてほしい」と言いました。父は特に理由も聞かずに「ああ、じゃあ頑張れ」と。僕はもともと手先が器用ではないので、不安はありました。でも、とにかくできるまでやるしかないと思ってスタートし、今に至ります。

自営業は、生活全部が仕事で、休みも自分ではとっていません。でも、楽器を作っている時間が一番気持ちよくなります。誰にも雇われない仕事というのは一見すると自由ですが、そのすべてに責任が伴います。学園にいた頃から考えていた自由と責任というテーマは、今も仕事をする上での基盤になっています。(2016年10月15日談)

左ページ | お客様から預かった楽器の裏板の塗装修理

右ページ上 | 表面板裏に接着したサウンドホールの補強材に溝を掘る

右ページ下 | サウンドホールの周りの飾りとして埋め込むロゼッタのピースと図面



1986年生まれ。2009年自由学園最高学部卒業後、1年間は音楽をしながらアルバイトをし、その後の生き方を模索する。10年に父である棚寝孝次郎に師事、クラシックギターの製作を始める。12年スペインのグラナダに滞在し、父の師匠でもあるアントニオ・マリン・モンテロ氏に師事。帰国後は、ギター製作の傍ら東京のギターショップアウラにて週1回リペア(修理)スタッフとして勤務。

品物と共に思い出も持ち帰っていただく

大嶋桃子 / Momoko Oshima

49AV.junko shimada 日本橋高島屋店店長

2007年最高学部卒業

それぞれの接客方法

ジュンコシマダというブランドのお店で販売員をしています。今は日本橋高島屋店の店長です。学園の最高学部の時にフランス語を勉強し、パリコレクションに興味があったこと、成人式の時に母が買ってくれたのがジュンコシマダのお洋服だったことなどから、試験を受けました。

入社後、2日間研修があり、その後すぐに玉川高島屋店に配属されました。今は違いますが、当時はすぐ現場に出されて、仕事に関することはすべて実地で学んでいく形でしたね。最初は、在庫管理

や棚卸など裏方の仕事を主にしながら、だんだんにお店にも立つようになりました。私が最初に販売したのは水玉模様のニット。今でもよく覚えています。4月2日に配属になって、ニットがようやく売れたのが4月20日頃でした。

仕事では、個々の売り上げのノルマがあります。最初は担当するお客様がいないのでなかなか達成できませんでしたが、お礼状を出したりお電話をしていたら、だんだんとお客様がついてくださるようになり、3年目くらいからは達成できるようになりました。

このブランドの主なお客様は50～60代の方ですが、私は話し方がゆっくりなので、そういう年代の方の接客が自分に合っていたようです。



接客方法は、店員それぞれに違いますが、1年目は、定期的に店舗にくるマネージャー(店長の上の役職の人)から「もっと積極的に売って」と言われて、その通りにしたこともあります。でもあまりうまくいなくて。その後、自分はお客様の希望をよく聞いてから一緒にお洋服をさがす、というスタンスが合っていることに気付き、今もその姿勢で接客をしています。

お付き合いが長くなると、お客様のお嬢様が結婚されたり、お孫さんが生まれてお宮参りに行かれるなど、大事なシーンで着るお洋服を選んでいただくこともあります。そういう場面で協力できるのは嬉しいですね。

店長になって見えたこと

入社5年目でサブ店長になり、2013年11月には店長になりました。もともと他の店でサブをしていたのですが、ある支店のスタッフがそれぞれの事情で全員退職してしまい、その後に来た店長も体調を崩してしまいました。

それで、以前そのお店にいたことがある私が異動して店長になったのです。とはいえ、スタッフもこのお店が初めての人ばかりで何もわからず、1年目は販売促進計画を立てるだけで精いっぱいでした。ダイレクトメールの切手代やイベントのプレゼント代など、「これだけ売りますので、この予算をください」と計画を立てるのです。実際に販売した後は売上実績を見て、目標額が達成できなかったときは原因を考え、次に生かします。

スタッフみんなが気持ちよく仕事ができるようにするのも、店長の役割の一つです。2年目からは少し全体を見る余裕も出てきました。そのお店は、20代、40代、50代のスタッフが1人ずつ。私も入れて4人でしたが、その中に自分の営業成績だけを上げようとする人がいました。他の担当者のお客様もとってしまうのです。

私は、自分がお洋服を売ったとしても、ストック場から必要な商品を持って来たり接客を手伝ってくれるスタッフや、さかのばれば商品の企画や生産に携った人があるからこそ売れるわけで、自分一人の実力だなんて考えたことがなかったので驚きました。そして、ガツガツしている店員がいる店はその雰囲気がお客様にも伝わってしまい、お店全体の売り上げも伸びないと思いました。

そこで、私は自分から、以前担当したことのあるお客様でも、次にいらしたときに話していたスタッフのほうが相性がよさそうだったらその人をお願いし、忙しそうな人を積極的にサポートしました。すると「私が私が」と売っていたスタッフもだんだんとそれを理解してくれて、同時にお店の売上目標も達成できるようになっていきました。

お店で買う意味

今は、百貨店を訪れてくださるお客様の数が減ってきています。買い物の仕方のバリエーションが増え、お洋服もオンラインショップで簡単に手に入る時代になりました。便利ではありますが、「お洋服を買う」という目的だけで終わってしまうオンラインショップに対し、



リアルな店舗だと、そこに1人のスタッフが入って人から買うので、満足感が違うと思います。お洋服を売ってはいませんが、実際にはスタッフのファンになっていただいている部分もあると思います。

お店で、スタッフと色々な話をしながら、一緒に希望のお洋服を探して購入する。それは、品物と一緒にその時間と空間の思い出も持ち帰っていただくことです。だから、お店全体の雰囲気もとても大切なのです。

一緒に働く人が協力すれば、2人なら2倍以上、5人なら5倍以上のよい結果が出ます。それは学園でたくさんの行事の運営を任せられたから、自然と自分の中にしみこんでいる考え方なのかもしれません。(2016年10月15日談)

左ページ | 「お客様一人ひとりのライフスタイルをさりげなく伺いながら、商品をおすすめしています」と大嶋さん

1984年生まれ。2007年自由学園最高学部卒業後、(株)ジュンコシマダジャパン(現(株)クロスプラスリテール部門ジュンコシマダ事業部)入社。玉川高島屋店へ配属。その後、池袋東武店、松屋銀座店、新宿高島屋店へ配属。12年にサブ店長、13年11月に日本橋高島屋店店長になり、現在に至る。

信じる道を走り続ける

山北道智 / Michitomo Yamakita

外資系金融機関 / アドベンチャーレース出場

2009年 最高学部卒業

自由になるための選択

今は外資系金融機関で、営業職として働いています。具体的には大手銀行などへ、為替や株などをはじめとする、経営に必要なデータを販売しています。この会社にて7年目。外資系企業は社員の入れ替わりが激しく、ほとんどの人が3年ほどで転職していきますから、僕は今、社内で3番目に在職期間が長くなっています。

30～40代で途中入社する人が多い会社なのですが、僕の場合は23歳で金融の仕事も未経験のまま入ったので、最初の1年間はカバン持ちをしながら仕事を覚えていきました。営業ノルマはかなり厳しいですよ。一応上司と相談という形にはなっていますが、毎回ハイレベルのノルマを課せられます。

僕はここ数年、毎年2～3週間のまとまった休暇をとるため、短期

間でノルマを達成するよう努力していました。他の人が嫌がる仕事を引き受けていると、結果的に信用を得ることができて、いい条件の取引を任せられるようになっていった。そのため短期でのノルマ達成が可能になりました。

金融に興味を持った原点は小学生の時です。その頃、親の仕事の関係でブラジルに住んでいたのですが、貧富の差が激しく路上生活者を日常的に目にする環境でした。その中で、「人間が本当に自由になるためには、経済的な自立が必要だ。自分は将来ちゃんと稼ぐぞ」と思ったのです。

その後、自由学園の最高学部1年の時に、教室の本棚にあった『敗者のゲーム』(チャールズ・エリス著)を読みました。世の中はこれから金融業界の好況が始まる、という時期で「こうすれば儲かる」というあやしい本がたくさん出ていましたが、この本には、「市場経済に





偶然はない」と書かれていて驚いたことを覚えています。そして、お金の動きにこそ人間の本性が表れると感じ、金融に興味をもち、関連企業でインターンもしました。

アドベンチャーレースの魅力

卒業後すぐに金融系の企業に就職したかったのですが、ちょうどリーマン・ショックの後で、募集がほとんどありませんでした。それで国内の商社に就職したものの、休みがとりにくいという理由で、1年で退職。その後、学園時代のインターンで知り合った方の紹介で、今の会社に入社しました。

働きながらもまとまった休みがとりたかったのは、趣味で続けているアドベンチャーレースの海外遠征のためです。このレースは、自然の中でカヤック、トレッキング、マウンテンバイクなどの種目を、男女混合チームで数日間かけて競い合うチームスポーツ。4人一緒にゴールすることがルールで、コースは400～700キロ、期間は長くと10日間ほどかかります。レースは過酷ですが、大自然の中に入るので、日常とのギャップが大きいのが魅力です。

始めるきっかけは学部2年の時。あるフリーペーパーで、アドベンチャーレースのプロチーム「イーストウィンド」が研修生を募集していることを知って、応募しました。半年間群馬で研修を受け、2007年、在学中に中国でのレースに出場しました。

その後も08年ポルトガル、13年パタゴニア、コスタリカ、15年ブラジル、16年チリと、同じチームで出場してきました。特に印象的だったのはパタゴニアです。最初に道のない山や谷を磁石と地図だけを頼りに4日間かけて越えたのですが、民家をはじめ、人工物が一切目に入らなかった。日常生活ではなかなかできない経験です。

レースのためのトレーニングは、通勤をランニングでして、多い時で月800キロ走っていました。

チームメンバーは4人で、40代の男性リーダーと30代の男性、20



代の女性と僕という構成です。メンバーの性格はそれぞれ違い、合わない人とは合いませんが、無理に折り合いをつけようとはせず、淡々と前進し続ける感じです。それは仕事でも同じで、上司の態度が変わることはよくあるし、かといってお客様に迷惑はかけられない。板ばさみの中でなんとか問題を解決していくのと似ている部分があると思います。

お金に振り回されず

いくつものレースに出てきましたが、今後はこのチームで出場することはないと思います。というのも、今年の秋から四国にある地元の銀行に転職するからです。外資系企業は、給料は確かにいい。小さい頃の経験から、お金が大事だと思ってはいますが、同時にそれに振り回されてはいけない、稼ぐことだけが働く目的になってはいけないと考えていました。また、20代のほとんどを外資系で働いてきたので、30代は地元で力を出したいと思ったのも転職の理由です。

小さい頃香川に住んでいたこともあり、四国はなじみ深い場所です。以前から、東京一極集中を何とかしたいとも思っていました。このタイミングを選んだのは、長男が来年度幼稚園入園だから、というのがあります。結婚する時から、妻にはいつか地方に行きたいと伝えてあったので、納得してくれました。状況は変わりますが、これからも信じる道を走り続けたいと思っています。

(2016年9月10日談)

左ページ | 2015年11月、ブラジルのレースでチームのメンバーと。右端が山北さん
右ページ左 | 2013年2月、チリ(パタゴニア)でのレース後に
右ページ右 | 2016年、マウンテンバイクでパタゴニアを力走する
(写真はすべて本人提供)

1987年生まれ。2009年自由学園最高学部卒業。同年4月神鋼商事入社。10年マークイットグループ日本株式会社入社、営業部に配属。13年アシスタントバイスプレジデント、14年バイスプレジデントへ昇進。16年10月より四国にある地方銀行へ。趣味のアドベンチャーレースでは、2007年より世界各国での試合に出場している。

答えは自分の中にある

石田咲子 / Sakiko Ishida

NPO法人山友会 相談室スタッフ(有看護師資格)

2001年最高学部卒業

屋根とお金があっても孤独

今私は、東京・山谷にある山友会というNPO法人で、看護師資格を持つ相談員として働いています。山谷はかつて日雇い労働者が多く住む地域でした。仕事を失って路上生活を余儀なくされた多くの方も生活保護を受けるようになり、だんだん減ってきていますが、お酒やギャンブルに浸ってしまう人が多く、屋根とお金があっても、深い孤独感の中に生きる現実があります。

そういう人たちが、日中集まってごはんを一緒に食べ、おしゃべりしながら、コミュニティを作っていく活動をしているのが山友会です。私の仕事は、病院に行かなくてはならない方と一緒に病院へ行き、医師の話を一緒に聞いて、その後の服薬のケアなどをすること。顔を出さない方を訪ねて、「最近どう?」と様子を聞くこともあります。

昨年まで4年間は、JLMM(日本カトリック信徒宣教者会)から派遣されて、カンボジアの教会で会計や村人の健康を支える仕事をしていました。任期を終えて帰国し、どこで働こうかと迷っていた時のこと。当時の私は髪の毛が長くて、顔も真っ黒に焼け、ほとんどカンボジア人状態だったのですが、山友会で料理を手伝っていたら、むかし路上生活をしていたあるおじさんに「お姉さん、日本語上手だね。どこから来たの?」と言われたんです(笑)。

それがとても嬉しくて。帰国したばかりで、日本に殺伐とした雰囲気を感じ、自分の居場所がないと思っていたのですが、そのおじさんの一言は、私に居場所を見つけるきっかけを与えてくれました。それで山友会で働くようになったのです。

友人の交通事故死

看護師を志したきっかけは、中学2年の時の友人の交通事故死です。その時から命や、生きること、死ぬことについて考え始め、学園卒業後に看護学校で学び、資格を取りました。

その後は病院の救急救命センターに勤務。もともとホスピスで仕事がしたいと思っていたのですが、看護学校の先生の「人の病気や体調が刻々と変わっていく、緊急の場面を学んでからのほうがよいのでは」というアドバイスで選びました。

ですが、ここは相当過酷だった。一分一秒を争うし、薬も何ミリ単位で投与しなければならない。のんきな私にとって、命を預かる現場

は緊張の連続でした。実は一度、大失敗をしています。看護師になって1年目、夜勤明けの朝の一番忙しい時間に、ある患者さんが狭心症と思われる胸の痛みを訴えました。先輩たちも忙しそうだったので確認できないまま、薬を間違った方法で投与してしまっ。幸い患者さんの命に別状はありませんでしたが、担当医師からは「お前は患者を殺す気か」と怒鳴られました。

もう辞めようかとも思いました。でも私は、まだ看護の魅力すらわかっていない。今ここで逃げてしまったら、どの仕事からも逃げるこ





とになるのかもしれない。こんな私が看護師を続けていいのだろうか……と悩んでいたら、3年目の先輩に言われました。「続けていいかではなく、自分がやりたいかどうかでしょ」。その時自分の内側に、続けたいという気持ちが、わずかですが確かにそこにあることに気付き、続けることを選びました。

人間なので、誰にでも失敗はあります。自分が3年目になり、苦しんでいる後輩の話を聞いて一緒に考えている時などに、あの、どん底まで落ちた経験が生かされていると感じました。

純粋な信仰心に触れて

その後、病院を退職してカンボジアへ行ったのは、学園時代に聖書を通して出会った、「ともに生きる」という言葉に背中を押されたからです。

カンボジアのある村では、幼い子どものいる女性が結核にかかり、動けなくなっていました。病院へ一緒に行き、薬を処方してもらって帰宅。その後も薬を飲んでいるかどうかなどを聞きながら、フォローしていきました。すると、少しずつですがよくなって、最終的には自転車にも乗れるようになったのです。

彼女はキリスト教の信者ではありませんでしたが、子どもが教会の識字教室に来ていたため、一緒にお祈りをしていました。そして病気がよくなってきた頃、彼女は「私はイエスを信じます」と言いました。その信仰心は本当に純粋で、なんだか私はイエスが生きていた時代がそこに再現されたような感覚を覚えました。

貧しく小さくされた人たちとともにいるイエスに仕えていきたいと思い、帰国後、修道会に志願して入会しました。今は週に4日、修道会で学んだり働いたりしています。実は30歳を過ぎて、付き合っていた人との結婚を考えたこともありましたが、「より自分が自分らしくいられるのはどの道か」と考え、祈り、この道を選びました。

人は、生まれた時からそれぞれの使命を与えられていて、それを探そうといろいろなことに挑戦します。でも実は、答えは自分の中にあって、ふとした時にそれに気付かされるように思います。私もまだ完全には気付いていないかもしれませんが、見つけるためには自分自身の感覚や思いを大切に。人と交わるだけではなく、時には孤独になって自分を見つめることも大事かもしれません。(2016年10月4日談)

左ページ上 | カンボジアの子どもたちと、世界共通のジャンケンポン(本人提供)

左ページ下 | 子どもたちに連れられて村の家庭訪問に出かけます(本人提供)

右ページ | 日々の四方山話から人生相談まで。おじさんたちの物語が紡がれる相談室

1981年生まれ。2001年自由学園最高学部卒業後、聖隷クリストファー大学看護短期大学部入学。04年に卒業し、看護師免許取得。同年聖隷三方原病院就職、救命救急センター勤務。09年、海外で働く準備のためイギリスへ語学留学。10年より4年間、JLMM(日本カトリック信徒宣教会)よりカンボジアへ派遣。15年帰国。認定NPO法人山友会就職。無料診療所の看護師として勤務。16年援助マリア修道会に志願者として入会。山友会相談員として勤務。

学校法人 自由学園

〒203-8521

東京都東久留米市学園町1-8-15

TEL:042-422-3111(代表)

<http://www.jiyu.ac.jp/>

発行日 | 2016年11月19日

発行人 | 高橋和也

編集 | 菅聖子

取材・文 | 菅原然子

写真 | 赤木真二

デザイン | 川村格夫

展示 | 大柳陽一

製作 | 赤木博子 柏原健一

* 製作スタッフはすべて自由学園の卒業生です。

* 本誌へのご意見ご要望、卒業生のご推薦は下記にお送りください。

100nin@jiyu.ac.jp

100V01 - 10000